予算特別委員会続報

東部低地帯水害

和泉都議が重ねて問題提起

越流洪水対策に スーパー堤防 より アーマーレビー工法等の検討を

荒川鉄橋架け替えは一歩前進

和泉なおみ都議は、東京東部低地帯の水害対策にとりくんできました。堤防の高さが周囲よりも3．7メートルも低くなっている京成本線荒川鉄橋問題については、2020年に本会議質問、文書質問と連続して取りあげ、橋梁架け替え事業がおくれていることについて、東京都が傍観者となっている姿勢を追及しました。

その結果、国・都・区の合同対策協議会が発足し、国もその計画を見直し、2022年からいよいよ工事着工することを明らかにしました。

スーパー堤防計画は現実的なのか

なぜなら、いま国がすすめようとしている区内西新小岩の中川左岸スーパー堤防計画は、洪水が堤防を越えて越流することを前提にしているからです。洪水が堤防を越水すると堤防の裏側が洪水に洗堀されて決壊することが知られています。

堤防は高さだけでなく、堤防強化が必要

これに対して国も都も唯一の対策として考えているのがいわゆるスーパー堤防（高規格堤防）計画です。

国のスーパー堤防計画というのは、堤防の高さの30倍の長さを緩い傾斜をつけてつくる堤防のことです。そのためには住民を移転させて、まちづくりと一体ですすめなければなりません。

和泉都議はこのやり方が水害対策として現実的なのか、とただしました。荒川についての国のスーパー堤防計画は1988年から始められていますが、計画で定められたような形で完成している区間は何％になったのか、いつ全体が完成するのか、と追及しました。

30年でわずか1．4％の整備率

これに対して都は「整備率は現在1．4％であり、河川全体が完成する時期はわかりません」とこたえました。

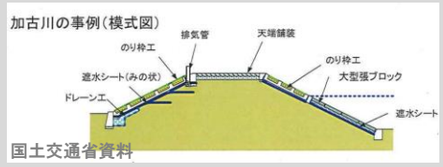
和泉都議は「スーパー堤防が整備されたところは決壊しにくくなっても、それ以外のところが越流によって決壊すれば大災害は免れないし、川が越流しているときに川に向って避難する人はいませんから、スーパー堤防が緊急の避難場所になることもない」と指摘しました。

新しい技術・手法の検討を

そのうえで和泉都議は、完成がいつになるかもわからない住民追い出しのスーパー堤防に莫大な予算を費やすのではなくて、都としてもアーマーレビー工法など堤防強化の新たな技術や手法について検討し、国と協議すべきだと強く求めました。

アーマーレビー工法

川裏側の法面を遮水シートと連接ブロックで保護して越水による洗堀を防ぐようにつくられた堤防のこと。1990年から試験的に事業実施され、すでに全国でもいくつかの施工例があり、効果が検証されている。国は一昨年の台風19号のあと、技術検討会をたちあげている。



後援会総会で都議選に向け決意表明する和泉都議

日本共産党 都議会議員
和泉なおみ の
さわやかレポート
発行　和泉なおみ事務所
葛飾区東立石 3-25-8
TEL 5671-0850
FAX 5671-0851
NO.57
2021.5